

学校教育目標		視覚障がいのある児童生徒一人一人の人権を尊重し、障がいの特性等に応じた教育を推進するとともに、自立に向けた意欲の向上と知識・技能の習得を図る。 (ミッション) 視覚障がいのある児童生徒への配慮と工夫を大切にしながら、社会的自立に向けて適切な教育環境を提供する。 (キーワード)「つながる」	今年度の 重点目標	① 学習指導の充実 ② キャリア教育の推進 ③ 人と関わり合う児童生徒の育成 ④ 視覚障がい教育の啓発と発信 ⑤ 安全・安心な環境づくり				
年 度 当 初				最 終 評 価 (1月)				
評価項目	部科・分掌	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	評 価 基 準	経過・達成状況	評価	次年度への方策
① 学習指導の充実	教務部	○ 今年度、個別の教育支援計画が新様式となり、年間学習指導計画と個別の指導計画が一体化した形での指導計画も新たに運用が始まっている。 ○ 年間計画の中で、今までよりも個別のねらいが明確化されている。	○ 教科・領域のねらいや内容をおさえつつ、個別のねらいに迫る学習が展開されている。 ○ 授業運営の年間の流れ(評価・変更点・課題・改善点を含む)が個別のねらいの評価とともに、指導計画の中に記録とともに残っている。	○ 長期目標(3年)達成へ向けての今年度の目標を話し合いによって決定し、授業担当者等へ伝える。 ↓ 個別のねらいを明記した年間学習指導計画をたてる。 ↓ 各単元等、短いスパンで評価・改善をし、次の計画へ反映させることを周知する。(参観ウィークの相互参観等、授業や児童・生徒の様子について伝え合い、指導に生かす) ○ 指導計画は共有ファイルとする。 ○ 校長・教頭より指導助言を受ける。	A: 指導計画・支援内容に十分改善や工夫がされている。 B: 指導計画・支援内容に改善や工夫がされている。 C: 指導計画・支援内容に一部改善や工夫がある。 D: 指導計画・支援内容への改善がない。	・授業実践と支援、児童生徒の変容、評価が一つになってきた。 ・指導計画に個別の支援目標を書くことで、各単元の中で意識して指導にあたることができた。 ・評価に関わる様式が、書きやすく、見やすくなった。 ・指導計画などのデータ化が進み、作成担当者の負担は減った。	B	・今年度の評価を生かし、次年度の個別の教育支援計画を立てる。 ・個別の年間目標の検討の場を明確にし、各教科領域で、指導計画を立てるときの指針とする。 ・同じ授業を担当する教科・領域の担当者がより連携を深め、担任ともデータ等を通して児童生徒の変容を共有する。
	教育研究部	○ 視覚障がいのある児童生徒一人ひとりの特性に合わせて、ICTを含めた教材・教具の工夫をしながら授業実践を行っている。 ○ 一方、今年度10名以上の教職員の異動があった。改めて、視覚障がい教育の専門性の維持・向上への取り組みが必要な状況である。	○ 教職員は視覚障がい教育の専門性向上のために研修や授業参観、実践研究に取り組んでいる。また、それらについて共有するとともに、一人一人の特性に合った指導実践に生かそうと取り組んでいる。	○ 年間を通して研修日を設定し、計画的に研修を進め、授業実践に活かす。 ・グループ別研究:各グループのテーマを設定し、具体的な指導方法や授業づくりについて研究を深める。 ・各種研修の改善:ICTの効果的な活用、自立活動、教材教具、歩行など分野別に実施する。職員間での専門性の差を活用した研修形式を計画する。 ・研修報告:グループ別研究、外部での研修、研究会での発表研究について報告会を開き共有する。	≪ 研修・研究を実践して成果を感じた職員の割合で評価 ≫ A: 3分の2以上の職員 B: 半数以上3分の2未満の職員 C: 3分の1以上半数未満の職員 D: 3分の1未満の職員	・校内研修は年間計画に沿って、内容の充実や研修形式の改善を図り、研修の充実を進めるとともに、研究はグループで取り組んだ。 ・研修については100%の職員が学ぶことが多かったと答え、研究については64%の人が成果を感じたと回答した。	A	・研究について充実させる方策を考え、より良い研究を推進し、授業力向上につなげたい。
	支援部	○ ICTを活用した学びの支援事業の3カ年を終え、機器は充実しており、教職員のICT活用スキルも高まってきている。今年度は、児童生徒への活用の充実が期待される。	○ 児童、生徒がICTを活用することにより、学習の効果が上がり、力をつけることができる。	○ 定期的に活用方法の提案を行ったり、ICTサポーターから助言をもらったりし、ICT機器を活用できる環境を整えることで、学習効果をあげる。	≪ 児童生徒にアンケート実施 ≫ ＊口頭での聞き取りも可 A: 児童生徒の全員がICT機器を活用することで学習効果があがったと答えている。 B: 80%の児童生徒がICT機器を活用することで学習効果があがったと答えている。 C: 50%の児童生徒がICT機器を活用することで学習効果があがったと答えている。 D: 30%の児童生徒がICT機器を活用することで学習効果があがったと答えている。	・児童生徒全員にアンケートをとった所、全員がICT機器を活用することで学習効果が上がったと答えた。 ・ICT機器は盲学校の学習においてなくてはならないものになっている。	A	・児童生徒によってICT機器の使用状況は様々である。今後もICTサポーターと協力して、児童生徒にとってよりよい活用方法を探索・開拓し、学習効果を高めていく。
	保健医療科	○ 生徒の実態に合った適切な学習手段・方法を確立し、学習内容の理解定着を図ることが課題である。	○ 自分に合った効率的な学習方法を確立し、自主的・積極的に学習に取り組むことで、専門的知識が定着している。	○ 生徒の見え方や課題に応じた学習手段・方法を確立するために、授業内容・教材・指導法を工夫する。	A: 生徒の課題に応じた適切な指導を行うことで、学習手段が確立され、十分な学力向上につながっている。 B: 生徒の課題に応じた適切な指導を行うことで、学習手段が確立されている。 C: 生徒の課題に応じた適切な指導を行うことで、学習手段が確立されつつある。 D: 生徒の課題に応じた適切な指導を行うことができず、学習手段が確立できなかった。 E: 生徒の課題を的確に把握できておらず、適切な指導ができていない。	・自立活動の時間や教科の学習の中で、拡大読書器の操作方法を指導したことで、学習に活用できるようになった。また、拡大読書器やブレクストークを購入するための支援を行い、自宅での学習環境が整った。 ・自分に合った学習方法を模索し、取り組み始めたところである。	C	・生徒の学習課題に応じた手段・方法による知識の定着を図るために、授業内容・教材の提示方法・指導法を工夫する。
	専攻科	○ 生徒は全員が中途視覚障がい者で、入学時には自己の見え方に合った方法で効率的に学習する手段や方法を持っておらず、また、確立までに長期間を要することもある。	○ 生徒は、視覚の状況等に合った学習手段を身につけ、適切な教材を用いながら、見通しを持って、継続的に効果的な学習に取り組んでいる。	○ 視覚の状況、視覚補助機器の活用技能に応じて自主学習を効率的・効果的に行えるよう、科目担当者が共通理解のもとに連携して適切な教材教具の提供、授業作りを行う。 ○ 国家取得に必要な基礎的、基本的学力の育成を図るために、小テストを頻繁に行って学習内容の定着度を適切に把握し、これに応じた教材の変更、授業改善など適切な支援を連携して行う。	≪ 生徒へのアンケートによる評価 ≫ A: 視覚の状況、学習の状況の丁寧な確認、実態に即した教材の提供、授業の工夫が、どの科目においても十分になされ、自分に合った学習方法で効率的・効果的に基礎的・基本的知識の定着のための自主学習に取り組んでいる。 B: 視覚の状況、学習の状況の丁寧な確認、実態に即した教材の提供、授業の工夫が8割以上の科目でなされ、自分に合った学習方法で効率的・効果的に基礎的・基本的知識の定着のための自主学習に取り組めていない科目が複数ある。 C: 視覚の状況、学習の状況の丁寧な確認、実態に即した教材の提供、授業の工夫が6割以上の科目でなされているが、自分に合った学習方法で基礎的・基本的知識の定着のための自主学習に取り組めていない科目が複数ある。 D: 視覚の状況、学習の状況の丁寧な確認、実態に即した教材の提供、授業の工夫が多くの科目でなされず、自分に合った学習方法で基礎的・基本的知識の定着のための自主学習にほとんど取り組めていない。	・生徒が自分に合った学習方法で基本的知識の定着のための自主学習行えるよう多くの科目で取り組めているが、生徒のニーズに合った改善が2学期以降も全科目に広がっていない。	B	・生徒の実態、ニーズに合った授業づくりがなされているか、全科目において検証するための授業参観、研究会を設定する。
② キャリア教育の推進	中学部	○ 盲学校卒業後の進路について、段階的に学習を進めているところである。 ・総合的な学習の時間、自立活動、作業学習を通してキャリア教育を推進しており、昨年度は職場見学や体験学習も行った。 ・校内では、「ワイワイお助け隊」として、ボランティア活動を継続して行い、活動の意義や自分の役割を理解し、意欲的に取り組んでいる。 ・しかし、校外での就労に関する体験活動はまだ少ないため、実際の場面での具体的なイメージを十分につかめていない。	○ 教師の支援を受けながら体験的学習(活動)や情報収集を行い、盲学校卒業後の過ごし方や、就労に関して一つでも具体的なイメージを持っている。	≪ 重複障がい学級 ≫ ○ 作業学習や総合的な学習の時間、自立活動、学級活動、産業現場等における実習、わくわく鳥盲で、就労につながる学習を積み重ねるとともに、盲学校卒業後の進路について情報提供をおこなう。その際には、体験的学習を多く取り入れるように配慮する。 ○ 校内ボランティア活動をする中で人から感謝され、働く喜びを感じられるようにする。 ≪ 単一障がい学級 ≫ ○ 総合的な学習の時間や自立活動、わくわく鳥盲(職場体験)を中心に、卒業後の生活や就労について具体的なイメージを持って学習できるように、ICTを活用して、具体的な映像や資料の提示したり、生活スケジュールを話し合いながら計画したりする。その際には、本人の希望や状況をもとにして、生徒と共に将来像を考えていくことを大切にする。	A: 卒業後の過ごし方や就労につながる体験学習等に意欲的に取り組み、働く喜びを感じている。 B: 卒業後の過ごし方や就労につながる体験学習等に楽しみながら取り組んでいる。 C: 卒業後の過ごし方や就労につながる体験学習等に興味を示し始めている。 D: 卒業後の過ごし方や就労につながる体験学習等にほとんど参加できていない。	・事業所見学では見学だけでなく作業体験も計画し、事前学習に取り組んだ。体験を通じて作業の難しさ、楽しさを感じさせ、「また体験にきたい」という意欲を引き出すことができた。 ・校内ボランティア「わいワイお助け隊」の活動では依頼がなくても自分たちで学校のために必要なこと、困り事を考える機会を設けた。窓掃除や玄関周りの清掃などを分担して行い、感謝のこばをもらった。	B	・生徒の自己理解が進むように作業学習や体験活動に対する評価をわかりやすく伝えるときに、今後工夫すべきことや改善点を具体的に伝える。 ・校内ボランティアの活動では生徒同士がニーズについて話し合い、主体的に活動する機会を増やす。
					A: 卒業後の過ごし方や就労について具体的なイメージを持ち、意欲的に進路学習や情報収集をしている。 B: 卒業後の過ごし方や就労について具体的なイメージを持ち、進路学習や情報収集をしている。 C: 卒業後の過ごし方や就労について具体的なイメージを持ち始め、進路学習や情報収集をしようとしている。 D: 卒業後の過ごし方や就労について具体的なイメージが持てず、進路学習や情報収集をしていない。	・修学旅行では、視覚障がいのスポーツ選手と交流し、生活や仕事について質問する機会をもった。事前事後には、パンフレットなど具体的な資料をもとに、視覚障がい者の就労について情報を知った。 ・次年度の産業現場等の実習に向け、職場調べの学習や事業所見学を実施した。	B	・産業現場等の実習に向け、わくわく鳥盲を体験して課題となった自力通所や休憩時間の過ごし方など働くために必要となる力を身につけられるよう計画的に学習を進める。 ・卒業後の生活や働くことへのイメージが持てるよう、先輩の話を聞いたり、職場などの見学をしたりする機会を設ける。
		○ 進路に関する情報を保護者と共有することにおいては、懇談等の機会をとりえて話し合いをしているが、各家庭によって差があり、十分には行えていない。	○ 盲学校卒業後の過ごし方や進路について保護者との情報交換を計画的に行っている。	○ 懇談では就労に向けて育てたい力と支援について話し合う。 ○ わくわく鳥盲や産業現場等における実習の様子について、保護者に見学をしてもらったり、体験後の職場懇談会と一緒に参加してもらったりして、情報を共有する。	≪ 保護者について ≫ A: 子どもの進路に関する情報を熱心に聞き、実習の見学や職場懇談会にも積極的に参加している。 B: 子どもの進路に関する情報を興味を持って聞き、実習の見学や職場懇談会にも参加している。 C: 進路に関する情報や実習の見学、職場懇談会に参加の意思を持ち始めている。 D: 進路に関する情報や実習の見学等自体に興味を持たず、必要感も感じていない。	・懇談ではわくわく鳥盲や産業現場等実習での様子や日々の学習状況をもとに来年度の実習先について複数のパターンを想定した話をした。 ・職場見学では保護者が生徒の作業体験を見た上で、サービス管理者の方と将来的なことについて話す機会を設けることができた。また、事業所の所長さんを囲んで茶話会を開催し、就労に関する様々な情報を共有することができた。	B	・事業所見学や説明会などによる情報提供を継続的に行うとともに、福祉サービスの利用など就労を支援する仕組みを学ぶ機会を設け、幅広い観点から生徒に合った進路選択・決定が出来るようにする。

(資料2)		平成28年度 学校自己評価(最終評価)				鳥取県立鳥取盲学校			
学校教育目標		視覚障がいのある児童生徒一人一人の人権を尊重し、障がいの特性等に応じた教育を推進するとともに、自立に向けた意欲の向上と知識・技能の習得を図る。 (ミッション) 視覚障がいのある児童生徒への配慮と工夫を大切にしながら、社会的自立に向けて適切な教育環境を提供する。 (キーワード)「つながる」		今年度の 重点目標	① 学習指導の充実 ② キャリア教育の推進 ③ 人と関わり合う児童生徒の育成 ④ 視覚障がい教育の啓発と発信 ⑤ 安全・安心な環境づくり				
年 度 当 初					最 終 評 価 (1月)				
評価項目	部科・分掌	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	評 価 基 準		経過・達成状況	評価	次年度への方策
④ 視覚障がい教育の啓発と発信	支援部	○ センター的機能の充実を推進してきたが、福祉の分野との境界線がはっきりせず学校として関係機関の要望を全て満たすことが負担になってきている。また、教職員の異動に伴い、担当するための専門性の維持が難しくなってきた。	○ センター的機能としての、目的を明確にし内容を見直すことで、合理的な運営を行い、視覚障がい教育の理解啓発が進んでいる。	○ 要請を受けてから、実施までの流れ等をシステム化し、合理的に運営する。	A: 関係機関からの要請に対してすべてシステムにそって運営できている。 B: 関係機関からの要請に対して8割はシステムにそって運営できている。 C: 関係機関からの要請に対して5割はシステムにそって運営できている。 D: 関係機関からの要請に対して3割ほどしかシステムにそって運営できなかった。		・教育相談等において、実施要項や相談の流れを学校内外に示すことで、本校の支援内容と流れを確立しつつある。システムが変わったことで、以前に支援した関係機関においては、戸惑いも生じている。 ・相談業務において、相談対象者の実態把握に何度も電話やメールをする必要があったため、9月より「電話等における個人相談票」を作成し、相談先に記入してもらうことで、相談に必要な情報を合理的に得られるようにした。	B	・教育相談を希望する機関には、相談対象者一人一人の目的や評価、終了の時期を明確にして実施することを丁寧に説明する。 ・「電話等における個人相談票」の書式を見直すとともにHPIに掲載し利用しやすくする。
		○ 教育研究部と連携して、専門性向上を推進している。	○ 職員研修において、支援部に属している資料や補装具・補助具・日常生活用品等の提供及び貸し出しを行う。	○ すべての職員研修(支援部が関係する)で専門性向上につながるように、工夫した資料等の準備ができている。 B: 8割の職員研修(支援部が関係する)で専門性向上につながるように、工夫した資料等の準備ができている。 C: 5割の職員研修(支援部が関係する)で専門性向上につながるように、工夫した資料等の準備ができている。 D: 3割の職員研修(支援部が関係する)で専門性向上につながるように、工夫した資料等の準備ができている。	・児童・生徒、保護者が、受給申請を行う際、手続きの順序が事前に理解できるようひな形なども用意した。 ・貸出要請に迅速に対応できるように、教室等に設置してある拡大読書器や盲人用安全杖を適切に管理するとともに、管理台帳を作成した。 ・校内外の日常生活用具などの相談に対し、最適に相談に応じている。	B	・相談室等に展示及び保管している物品の一覧表を完成させる。		
⑤ 安全・安心な環境づくり	教務部	○ 個別的教育支援計画や指導計画、成績処理等、教務に関する作成文書の年間スケジュールが明示されておらず見通しが持ちにくい状況が見られる。	○ 見通しを持って業務を進め、ゆとりを持って児童生徒の指導・支援をおこなうことにより、児童生徒が落ち着いた学校生活を送ることができる。	○ 児童生徒の指導支援に係る作成文書を精選する。 ○ 年間スケジュール表を作成し、職員に提示する。 ○ 業務の進捗状況を把握して、適切な声かけを行う。	A: 年間スケジュールを作成し、見通しを持って業務が進められている。 年間スケジュールを作成し、周知されているが、見通しを持った業務が進められていない。 B: ない。 C: 年間スケジュールを作成したが、周知が不十分である。 D: 年間スケジュールが作成できていない。		・教務の年間スケジュールと成績処理・諸表簿処理の流れの案が作成できた。	B	・できあがった年間スケジュールと諸表簿処理の流れを、来年度は年度当初に提示する。 ・業務の進捗状況を把握し、適切な声かけを行う。
	指導部	○ 児童生徒の実態が多様化し、その意義を理解した上での避難訓練や安全教育をどのように行うかが課題である。 ○ 安全点検をして危険な場所・物のチェックをしているが、時々生徒が転ぶなどの状況も起こっている。	○ 教職員は安全教育の重要性を認識して、指導、環境整備をすることにより、児童生徒が安全な生活を意識した生活を送ることができる。	○ 日々の授業や活動、行事の中で、安全を意識した指導に取り組むとともに、安心安全な環境づくりに取り組む。	A: 安全を意識した指導により、児童生徒は危機回避行動が自主的に取れている。 B: 安全を意識した指導により、児童生徒は危機回避行動が取れるようになっている。 C: 安全を意識した指導により、児童生徒の行動に変化が見られつつある。 D: 安全を意識した指導に取り組むことが出来ていない。		・実際に地震が起こり、避難もスムーズに行われた。そのことから安全に対する意識も高まってきている。アンケートでも安全を意識した回答が増えてきた。	B	・今後も避難訓練の事前・事後に担任の先生から安全を意識した指導を継続していく。
	教務部	○ 年々、児童生徒数も減少傾向にあり、学校生活の中で多くの人と接し、活動する機会も限られてきている。 ○ 人権が尊重された環境の中で、人との関わりを通して自己肯定感を高め、安心して学校生活が送れるようにしていく必要がある。	○ 学校が、安心して過ごせ、学べる場となるよう、人権尊重の視点に立った環境の整備を行い、児童生徒、保護者の信頼感のもとで、学校運営を行うことができる。	○ 教職員が積極的に挨拶をすることで、児童生徒と教職員、児童生徒同士が自己存在感を高める雰囲気为学校全体に広げていく。 ○ 個を大切にした掲示物、校舎内外の整理整頓など美しい環境づくりを行っていく。 ○ 「学校だより」、「学級だより」、ホームページなど学校の様子について情報を提供する。	A: 人権尊重の視点に立った環境整備を行い、児童生徒が落ち着いて日々の学習や活動に取り組んでいる。 B: 人権尊重の視点に立った環境整備が不十分であるが、児童生徒が落ち着いて日々の学習や活動に取り組んでいる。 C: 人権尊重の視点に立った環境整備は行ったが、児童生徒が落ち着いて日々の学習や活動に取り組めていない。 D: 人権尊重の視点に立った環境整備が不十分であり、児童生徒が落ち着いて日々の学習や活動に取り組めていない。		・年度当初の実態把握に基づき、児童生徒一人一人の視覚障がいの状況や特性に応じて、教室環境の整備、教材教具の工夫や配慮等を行った。 ・児童生徒は落ち着いて生活しているように見えるが、中には悩みや心配事を抱えている児童生徒もあり、その把握と適切な対応はやや不十分である。	C	・児童生徒の表面的な姿のみではなく、心配事や悩みなど、心情や細かな部分もしっかりと把握し、適切に対応を行っていく。 ・児童生徒が心配事や悩みを伝えることができるような仕組みや教職員との人間関係の構築を構築していく。

総合評価の基準 A:十分達成 B:概ね達成 C:変化の兆し D:まだ不十分 E:目標・方策の見直し